

# 染香

ぜんこう

福泉寺寺報  
令和4年4月  
第106号  
毎月1日発行



ホームページ

歩こう会  
気づいてみれば  
アルコール会

## 親の心、子、知らず

おかげさまで我が家の長男が卒園を迎えまして、凜とした姿に成長を感じました。そして、その成長を日ごろから見守る先生がたの涙が、私の中に込み上げるものを覚えました。

本人の今の心境は、「毎日ゲームしたい」「小学校ちよつとこわい」「くらいいものでしょう。「親の心、子、知らず」です。

さて、つい先月、横浜の母が引越しをしました。年齢と体調を考えて、姉の住む家の近くのアパートを決めたのです。

ある日、母から電話がありました。「荷物の整理をしていたら、あなたの小学生の頃の絵が出てきたけど、どうする？」ということだったので、福山に送ってもらうようお願いしました。

到着した絵は、なんと大きな箱に、100枚以上。小学4年から6年までの1年間の作品やテスト用紙でした。

家族で絵を見ながら笑ったり、懐かしんだりのひと時を過ごした後、私はあることを思いました。

母にとって引越しは今回で2回目です。1回目の時には、新しい生活のために必要の無いものはずいぶん捨てました。その時に、なぜこの作品を捨てずに横浜に持っていたのだろうか。

## 親心に生かされて

私たちは「生活をする」上で役に立つものの、価値のあるものを取り入れて、そうでは無いものを、文字通り「無駄」と決めています。しかし、私たちは「生活をする」以前に「生きている」のです。生活を支える「根底」があるのです。

「生活」は思い通りにいかず、日々変化していきます。けれども、どんなことが起ころうとも、揺るがない「根底」がある人は、幸せだと思えます。

一度、「役に立つ」世界から離れて、「私が生きている根底」を問うてみてはいいかがでしょうか。  
(住職)

## 【できる！自宅葬・寺葬】

皆さんなぜか、自宅で葬儀をしたことは忘れずに覚えているようです。

「葬儀」は「葬送儀礼」の略称です。つまり、仏さまと私達の「縦の関係」を結ぶ厳粛な儀礼なのですが、みなで営む自宅葬は、それに関わる人たちの「横の関係」を感じやすいのでしょうか。お互いの行動や表情を感じるのは、葬儀会館の比ではないのかもしれませんが。だから、忘れられないのかもしれない。

ちょっと あたまの こりほぐし  
反抗期の子どもに  
買い物を頼んだら  
どんなものを買ってきたでしょうか？  
こたえは裏面でーす



## おてらより

### 春のお彼岸・永代経法要、

ようこそお参りくださいました

ゆつくり阿弥陀経をあげて幸せでした。初めての「リレー法話」は好評でした。お盆も検討してみます。

たくさんのお参り、感謝いたします。

### のりこっぽ

のりこ4部屋です。どうぞご連絡を！

### お農朝 (あさのおつとめ)

六時半〜七時  
再開しました。とにかく楽しい。

### 境内の墓地について

境内整地の第一弾として、南側の「無縁墓」を整理しました。墓地検討の方、どうぞお問い合わせください。

しっかり刻まれてます

岡山 蓮乗寺住職 田井 智彦

亡くなった後の仕事

先に亡くなった人はズルイ、と思うことがあります。こっちは老けていくばかりなのに、まぶたの裏に浮かんでくるあの顔も、耳の奥底に残っているあの声も、まったく歳を取らないし、なにより、悪い思い出は色あせて、いいイメージばかりが色濃くなっていくんですよね、なぜか。残してくれた言葉だってそう。ちょっと困ったときなんか、すぐに頼りにしてしまうんです。死んでるのに、「たぶん、こう言うだろうな」とか「ああ、怒られる」とかね。言われっぱなしで反論もできないし、ときには、それがしがらみになったり足かせになったりする。でも、それはそれで心地よくもあるんです。あの人はまだわたしの人生に関わっている、みたいなものですね。残された言葉とか教えに、亡き人の願いが込められているからなんでしょうか、逆らえないんです、あの人に。だから、ズルイ。亡くなる前は、そうじゃなかった。関係が近しければ近しいほど、「言われんでもわかっとなるわ」と反発して、ケンカにもなりましたよね。でも、いなくなっって初めて気付くんです、「ああ、

このことを言っていたのか」って。死んだ人は、亡くなった後の方が仕事するって、そういうことなのかってね。わたしの所へ還ってくるって、こういうことなのかと思うんです。

誰にだって、懐かしい人との思い出はごまんとあるし、忘れられない言葉の一つや二つはありますよね。もちろん、わたしにもあります、そんな言葉が二つほど――

死を覚悟した状態で

「田井よお、ホンマ苦しいときはなあ、殺してくれとしか思われへんのや。命の瀬戸際で、お念仏なんぞ出えへんぞ」

何があっても裏切れない大恩人であり、二人いる師匠の一人、僧侶であり説教師であり物書きだった某先生のひと言。もう10年近く前の話です。

型破りで精力的、前をしっかりと見すえながらも、繊細かつ淋しがり屋で人の心を読むのが実に巧い人でした。



缶に入った両切りのタバコを、40本から50本も喫んでいたんです、1日に。成るべくしてなった「肺がん」。お連れ合い曰く、「肺がんになつて本望。他のがんなら後悔してたけど、あれだけタバコを吸ってたからね」

病に冒されても、先生は先生のままでした。「好き放題、充分生きて」と豪語したかと思えば、人生初の入院で、お経典の「人は、ひとり生まれ、ひとり死んでいく」の言葉を実感し孤独に身がさいなまれた、とも聞きました。

手術前の検査を重ねるうち、カルテの中だけに自分の命があるかのように錯覚されたそうです。重要な検査の当日朝、始発のモノレールに飛び乗り逃げ出しもしたそうです。

長時間の検査に身体がたえきれず、持病の喘息（ぜんそく）が暴発。とうとう、西洋医学に見切りをつけ、漢方薬を服用するように。

「どや、元気そうになったやろ」の言葉は弱々しく、肉はそげ落ち骨と皮だけのような身体に。激しく咳き込み、呼吸器の入り口にへばり付く痰を切る。悶え苦しむしかない状態。「死」を覚悟されたのか、「死」を待っておられたのか。そのころ言い放ったのが、先ほどの「お念仏なんぞ」の件です。

もう一つのメッセージ

死の淵に立っていると実感した人間の本音を吐露してくれたんだと思います。でも、「やっぱり、ナンマンダブツやのう」と言っただけで、だから、忘れられない。

話はこれで終わりじゃありません。結局、近代医学に降伏して終末医療を受けることに。緩和ケアによって小康を得られました。最後のお見舞いで、わたしの胸にしっかりと刻んでくれた、もう一つのメッセージ――

「ワシはなあ、自分からお念仏を捨てたと思ひ込んどったんや。でもなあ、田井よお。阿弥陀はんは、ワシを捨てずにいてくれてたんや。ほら、いまでも、ワシの口から、ナンマンダブツが出てくださるんや。変わってないんや。捨てられてないんや。ひとりじゃなかったんや。かたじけないのう」

うれしすぎて忘れられない、お浄土を恋しくさせる珠玉のひと言です。

（本願寺新報2010年9月20日号）

